

白地着て行きどころなしある如し

藤田湘子

俳句を一生の仕事にしようと考えた青年湘子は、和服の一つくらい無ければ格好つかぬ、と思い、まず藍浴衣を買った。楸邨の「白地着てこの郷愁のどこよりぞ」という句が好きでいつか白紵を着たいと憧れていた。

二十八歳の時、念願の白紵を手に入れたが、まだ独身で下宿住いだつた。早く帰つて白紵を着てみたが、訪ねる句友もなく、暑い下宿の一室でくつろぎながらも、ぼやっと時間を過すよりほかなかつた頃に作つた句。

どこへ行こうか、どこへでも行ける。要は心ひとつなのだが、どこにも行き場のないような、やるせない思いに沈みこんでいると、まあいいか、とにかく一歩を踏み出そう、と思える時もある。そんな気分だろうか。